阪神・淡路大震災から10年を迎えて―あらためて震災と防災について考える

1995年（平成7年）1月17日AM5:46
冬の未明の関西をM7.2という未曾有のエネルギーが襲った。
淡路島北部を震源とするこの直下型大地震は
淡路島及び阪神間を中心とする広い地域に
大きな被害をもたらした。
被害総額10兆円規模、なかでも神戸市は壊滅的な状況だった。
あれから、10年――、被災地の復興はいまも続いている。
その取り組みの中から学ぶべきものは何か。
神戸出身の桂あやめさんと
防災の専門家として神戸の復興に深く関わってこられた
林春男先生をゲストに迎えて
それぞれのお立場から語っていただきました。

●京都大学防災研究所 巨大災害研究センター長●

林 春男教授

PROFILE

京都大学防災研究所 巨大災害研究センター長・教授
京都大学大学院 情報学研究科 社会情報学専攻 教授
専攻:社会心理学（災害時の人間行動／防災心理学）
1951年東京都生まれ。早稲田大学文学部心理学科を卒業後、1979年に早稲田大学大学院を修了。その後、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校（UCLA）大学院博士課程にフルブライト留学生として留学し、1983年同校から博士号(Ph.D.)を修得。さらに、弘前大学助教授、広島大学助教授を経て、1994年京都大学防災研究所助教授、1996年には京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授に着任、2005年4月より現職。

文部科学省 研究開発局地震調査研究推進本部専門委員
文部科学省 科学技術・学術審議会専門委員、消防庁 消防審議会委員等
主な出版物／「12歳からの被災者学～阪神・淡路大震災に学ぶ78の知恵～」（日本放送出版協会 土岐 憲三／河田 惠昭／林 春男 監修）、「いのちを守る地震防災学」（岩波書店2003年）、などがある。

●落語家●

桂 あやめさん

PROFILE

1964年2月生まれ。兵庫県神戸市出身。1982年、桂文枝に入門。女に落語は出来ないという固定観念の壁に、自作の落語で風穴を開けた。OL、女子高生、おばちゃん、嫁姑など、身近な女性を主人公にしたネタの創作で人気を得ている。また大阪・天王寺で「茶臼山舞台」という小さな寄席スペースを主宰し、多彩な新作ネタ下ろしの会を定期的に開催するなど、大いに注目されている。上方落語協会員。

主な受賞歴
・ABC漫才落語新人コンクール第8回(昭和62年)最優秀新人賞
・第1回大阪市きらめき賞(平成6年)
・咲くやこの花賞大衆芸能部門(平成9年)
・大阪市女性基金プリムラ賞(平成12年)
・文化庁芸術祭演芸部門優秀賞(平成14年)
レギュラー番組／すてき!家族（毎週月曜日SUNテレビ）・ムーブ!（毎週金曜日ABCテレビ） 出版物／艶姿なにわ娘（東方出版）などがある。

阪神・淡路大震災から10年 忘れられぬ『1月17日』

林 阪神・淡路大震災から今年で10年目です。桂さんはどちらであの震災を迎えましたか。

桂 私自身は神戸で生まれ育って、大阪で落語家をしているため、震災のときも天王寺のマンションにいました。生まれて初めての大きな地震に驚いてたら、テレビが神戸の震度の方がもっと大きいと言っていました。実家は神戸市兵庫区の築40年以上の木造の長屋、私が生まれてから一度も引越ししたことがない、関西でいうところの文化住宅でした。心配になって電話をしたけれども、全然通じない。心配しながらも仕事に行こうとしていたところへ、親戚から「実家がつぶれてお母さんはあかんかったらしい」という連絡が入りました。ちょうど前の晩、母親と電話をしていて「来月はカニでも食べに行こか」と電話を切ってから数時間後があの地震でした。「あかんかった」ってどういうことやろ。ぴんと来ないまま、とりあえず神戸に向かおうとしたところで、初めて「これはただごとじゃない」ということに気がつきました。

林 あの日、電車は西宮から先は不通でした?

桂 はい、結局その日は無理で、翌日西宮から歩いて神戸に入りました。今回の地震で、母親は突然亡くなり、父親は同じ1階で寝ていて建物の下敷きになりましたが、無事救出され外傷ひとつありませんでした。数メートルと離れていないところに寝ていても、ある人は生きていて、ある人は亡くなる、あるいは怪我をする、怪我もしていない――。そういうことが、選ばれたわけでもないのに突然やってくるもんなんやなあ。つくづくそう思いましたね。先生の1月17日はどうでしたか。

林 僕はちょうど17日から『日米都市防災会議』をやること

もともと日本は災害の多い国であったため、社会基盤整備の水準は非常に高いものがありました。

になっていたので、大阪の上六（上本町六丁目）の国際交流センターにいました。天王寺に近い所ですね。

桂　そういう会議が開かれていたことは聞いたことがあります。先生はそこにご出席で。

林　事務局長を仰せつかっていました。夜中の3時頃までその準備をやって、しばらく休んでいたときに地震の揺れで起こされた。だけど、外を見たところ心配するほどではなさそうに思え、むしろ「会議をしっかりやれ」というメッセージだと解釈してテレビをつけました。そうこうしているうちに被害の深刻さが徐々にわかってきたので、急遽、会議と平行して現地での調査活動を開始したというわけです。

桂　関西に日米の防災のスペシャリストが集まっていたというわけですね。

林　地震が起きた瞬間から日米の防災専門家が被災地に入ったというケースは、世界で初めてだったと思います。僕はそれ以来、10年間、被災地と関わるようになりました。

桂　今まで、神戸に住んでいると災害にものすごく縁遠くて、心構えも備えも何にも持ち合わせてなかった人が多かったように思いますが、専門家から見てもこの地震は意外なものだったんですか。

林　そうではありません。防災会議のタイトルが日本語で「巨大地震に備えて」というものであったように、日本に地震が起きそうなエリアが3つあることは、すでに十分知られています。そのエリアについても、①神戸から高槻にかけて、②糸魚川から静岡にかけて、③紀ノ川から四国の吉野川に沿っての中央構造線とされ、なかでも①地域は、ひとたび地震が起きれば被害が一番大きいと危ぶまれていた地域だったんです。

桂　私たちは地震が起きるなんて夢にも思わずに暮らしていたんですけど…。

林　もちろん、僕たちだってあの日起きるなんて思ってもいませんでした。ただ、地震というのは周期的に起こるもので、先の3エリアは活断層があるということが明確で、かつこの1000年くらい活動していないので、いつどれが動いてもおかしくないという状態だった。神戸の断層は2000年に1度動いているそうですが、そうなると前回はキリストが誕生した頃。人間の歴史感覚には収まらないくらいの大きな周期のため、人類の記憶に残っていなかった。

桂　災害がないといわれる地帯ほど危ないというわけですね。そろそろ起きると…。

林　そうです。しかし、神戸は戦争で空襲もあったし、阪神大水害も起きていますから、災害が少ないといわれること自体がよくある誤解なんですよ。

350万人もの"うるさい"関西弁の被災者が防災研究に貢献し、復興を牽引した?

桂　阪神・淡路大震災があったことで、防災の研究というのは進みましたか。

林　進んだと思います。もともと日本は災害の多い国であったため、社会基盤整備の水準は非常に高いものがありました。防災体制ということでは、1959年（昭和34年）の「伊勢湾台風」をきっかけに総合的・計画的な整備が行われました。すでに1946年（昭和21年）には「災害救助法」ができ、被災した人に対して最低限の支援をするという仕組みができていたものの、防災の主眼は毎年のように起こる風水害の被害をどうやって抑えるかにありました。何しろ、地震は起きるときに固まって起きるが、そうでないときは比較的起きない。日本の高度経済成長期というのはこの平穏期にあたっていたこともあり、地震のことをあまり考慮しなくてもよかった時代だったんです。

桂　防災についても風水害対策が優先されたわけですね。

林　地震対策については、基本的には関東大震災程度、つまり「関東中心、震度6程度」を想定して行っていました。ところが、阪神・淡路大震災では日本で初めて「震度7」という強い

●阪神・淡路大震災被災状況

地震が認められ、想像もしてなかった被害が集中的に起きた――。以前は、防災なんて学問はいらないとさえ思われていたのに、防災だけでなく、阪神間がどうやって立ち直っていくのか、という新しいテーマがいきなり突きつけられたわけです。幸い、350万人とも言われる被災者が関西弁の"うるさい"人たちだったことで（笑）、同時進行的に研究が進みました。

桂　関西人のストレートな物言いは落語のマクラに取り上げられるくらいインパクトありますからね（笑）。でも、その分きちんと主張しますから、関西はわかりやすい。

林　関西人にはリアリストが多い分、いろんな意味で被災者の声が初めて世間に「かたまり」として届く貴重な機会になったとも言えるわけです。いろんな問題をどうして欲しいかがよくわかり、本当に必要な対策が講じられるようになりました。この部分での貢献はすごく大きい。僕は新潟中越地震からの小千谷市の復興支援計画の手伝いもしましたが、向こうの人は関西人ほど自己主張しない。よく言えば奥ゆかしい。でも想いがないわけではないはずですから、表現方法が違うんでしょうね。

桂　今回の震災では、その関西弁のよさを再認識するような経験もありました。地震から3ヵ月経った頃のこと、神戸の街を歩いていると、満開の桜の下、そこの家の人がガレキの片づけをしてはるところへ通りかかりました。「桜は満開なのに家はつぶれている」という不思議な光景でした。そこへ知り合いらしい人が通りがかって、「大変でしたなあ、立派な家でしたのに」と声をかけはりました。そしたら、その家の方が「いやあ、うちはこの桜と一緒でんねん。どっちもゼンカイですわ!」。そしたら、もうひとりが「うちは貴乃花の成績と一緒ですわ。もうちょっとでゼンショウやった!」。で、お互い笑い飛ばして「さいなら!」ですわ。もちろん、この人は笑いを仕事にしてる人ではなくて、これが日常会話なんですね。満開の桜の下、神戸ではそんな状態の中だけで通用する「笑い」が起きてたんです。次にその家の前を通ったら、そこの家は立派に再建されていた。やっぱり、笑い飛ばすくらい前向きな人はパワーがあるんやなと、つくづく思いました。関西にはそういうふうにどんなときでも笑い飛ばせる人があちこちにいます。それに、関西弁のせいか悲惨な事実も聞く方からすればちょっと楽に聞こえる――。先生も少しおっしゃったように、関西で起こってまだ救われたなっていうところがありますよね。関西人ってやっぱり独特の自己主張とか明るさとかありますから。

林　神戸を取り囲むように「関西」というエリアが広がっていることも、被災地復興を考える上では忘れることはできません。もし、関西圏というヒンターランド（後背地）を控えていなけ

たいへんな状況だというのに、満開の桜の下、神戸では被災地の中だけで通用する「笑い」が起きてたんです。

お客さんが「さあ、笑わしてや」と満を持してるっていう状態は何を言っても反応が並じゃなくて、こっちがのけぞりそうになるくらいの気のパワーが返ってきました。

れば、神戸の復興はもっと遅くなっていたでしょう。経済の面からも、人的支援という面からも、傷口を取り囲むように広い面積で関西圏が取り囲んでいることが神戸の復興には幸いしました。

神戸人の私だから、落語会には自分の意志で来てほしかった

林　神戸のご出身とのことですが、震災後の神戸でも噺家として何か活動されたのですか。

桂　震災前から神戸では毎月落語会を開いていました。しかし、当然震災で中断です。よく、神戸の出身というだけでボランティアしてたと誤解されますが。神戸人の私からしたら、自分の好きなものは自分の意志で見に行きたい。ボランティアが来るからって行くのはちょっと違うと。

林　阪神･淡路大震災の復興のキーワードとして「自立と連帯」ということが言われましたが、「自立」というのは、結局「選択」であり、自己決定権なんです。自分が決めたんだから何があっても構わないから、自分の金で笑いたい。やはり、そういう気持ちを認めてあげる仕組みを作らないといけないといまの話で痛感しました。お金を取るところがあっていい。そういう多様性を準備することが一番のポイントですね。

桂　有料（1,500円）で会を開くことには多少不安がありましたが、震災から4～5ヵ月経ち、再開を望む手紙が届くようになり、6月に落語会を再開しました。そのときの笑いのパワーはこれまで参加した中でも一番でした。それはやはり、お客さんたちがいろんなボランティアやチャリティーの慰問を受け、ことあるごとに「頑張って下さい」と言われることに辟易し、自分で何かをしたいという人たちばかりだったからではないかと思います。そんな人が「さあ、笑わしてや」と満を持してるっていう状態は何を言っても反応が並みじゃなくて、こっちがのけぞりそうになるくらいの気のパワーが返ってきました。300席ほどの前売りがすぐ売り切れたそうです。それくらい、早くみんなが「普通に笑いたい」って思ってたってことなんでしょうね。気遣われて、気遣われて、頑張ってくださいって言われる。けど、「頑張ってるやないか」って。関西人ならではの主張をしたくなるっていう感じ。私も被災者という面が出てきて、被災者の気持ちがわかる、お互いだからこその自虐的なギャグも出てきて、痛いぐらいの笑いで盛り上がりました。

林　笑いにもマーケットがありますよね。有料であるのは構わないけど、その代わり質にうるさいわけなんですよ。閑古鳥が鳴いてるものもあれば、人が大挙して押しかけるものもある。さっきも言ったように被災地だからこうでなければいけないという型をはめずに、いろいろやってあげられるかというのが重要なことだと思うんですよね。もちろん、金額もリーズナブルにして。そういう意味でいいものが手頃な値段で手に入る街になることが一番重要なのかもしれない。僕が神戸の人たちにずっと言っているのは、他所の人たちがうらやましいと思うような暮らし方ができる街、そういう街に神戸がなれたら、それは本当の意味で神戸が復興したことになるということです。

桂　私も、神戸がどんなカッコいいブランドイメージで語られるよりも「神戸? いい街ですね」と言ってもらうのが好きです。

●メリケンパーク被災直後

●復興したメリケンパーク

世界が驚いた社会基盤の復興スピードは1年と4ヵ月

林　神戸の復興の一番の特徴は、その速さです。震災から丸2年、正確には1年と4ヵ月で社会基盤はほぼ元に戻りました。これは異例の早さで、世界中が驚きました。住宅の復興もすごかった。「3年で元に戻す」というスローガンを掲げ、数の上では3年で回復し、仮設住宅も5年で解消した。街が立ち直っていくスピードがものすごく速かった、最初の5年間は特にそうでした。

桂　3年目ぐらいに神戸に来た友人も「まだ震災の跡が残っているんじゃないかと思っていたけど、どこにもそんな様子は見えなかった」と言っていました。

林　ところが、復興の現場では、被災した人たちの「生活」まで含めて復興しなければ本当の復興とはいえないんじゃないか、という議論が起きていた。これは、阪神･淡路大震災で初めて明確になったテーマでした。何をどうするのか、ノウハウはなかったけれど、それでもやるべきこととして掲げたっていうことの意義は大きかったと思います。

桂　うちの父親なんかも前より広い間取りの家をもらうことになりましたけど、「けど、この向かいと隣がなかったら意味ないねん」言うてました。家で商売してるような職人やったもんで、毎日の生活がそのまんま近所の人とつながってたんですね。何時にこの喫茶店に行って、何時まで家で仕事をして、その後は立ち飲み屋に行って、向かいの米屋の親父さんと立ち話する。その生活を戻してほしいって言うてましたけど、無理なんです。でも、みんなそれがほしいって言うてました。「生活まで含めて復興する」というなかには「人とのつながり」が含まれていると考えるべきなんでしょうね。

林　被災地で「何が戻ったら、復興したといえるか」という調査をしたことがありました。そのときの1位は「住まい」、2位がほぼ横並びで「人とのつながり」で、3位以降とは比べ物にならないほどこのふたつがダントツでした。

街が少々汚くても、ゆっくり再生していけば被災地は自力回復できるはず

林　もうひとつ、「経済」の復興を目標に掲げたということも評価されるべきでしょう。残念ながら経済というのは閉じてないうえに、当時始まった不景気の影響を被災地がもろに受けてしまったためにうまく機能しませんでしたが。となると、今思うのは、本当にあんなに早く社会基盤をなおす必要があっただろうかということです。最初の2年間で7兆円というお金を被災地に投入したにもかかわらず、地元だけでそれを受け入れる度量がなく、結局、大阪や東京にずいぶん還流されたと聞きます。都市機能は戻るかもしれない、街はきれいになるかもしれない。けれども、そこにいる人たちにはその後に辛い状況が待ち構えることになる。それよりは、少し街は汚い状況が続くかもしれないけれども、できるだけ自分たちの力で、ゆっくりと再生産することです。そうすれば、自立できるし、回復していくことができる。

桂　そうですね。再建を急いだのもわからなくはないのですが、今から考えたらどうせ再建するのやから、町並みなんかはもっと統一感を持たせるとかしたほうがよかったんやないかと思いますね。「うちの店はこうする、けど他は知らん」で復興したところが多くて、なんやちぐはぐな感じのところが多い。ひとつのテーマを持って全体をこういう街にしようとか、壁の色を統一するとか。そういうやり方で復興後成功してるのはトアロードくらいじゃないでしょうか。

林　災害というのは大変辛い経験であるのは間違いないんですが、社会全体からみたら、これは街が変わるひとつの大きなきっかけと考えることもできます。

桂　そういう前向きな考え方がすごく求められていますよね。

林　今は無理でも、本来この街はこうしたい。そういう夢を描いておいて、災害が起きたときにそれが今生かされるのだという発想。こんな言い方をすると、「災害を好機と捉えるのか、不謹慎ではないか」とクレームが来ることがありますが、「好機」と捉えることすらできないようでは復興から立ち上がるパワーが出ませんよ。「前と同じ」ではなく、「もっといい街」

災害というのは大変辛い経験であるのは間違いないんですが、社会全体からみたら、これは街が変わるひとつの大きなきっかけと考えることもできます。

に変えていくのでなくては、亡くなった方や傷ついた人、失ったものに対して申し訳ないとすら思うのです。

桂　前向きに考えるかどうかということは個人個人の家でも全然違いますよね。例えば仮設住宅にしても、以前便利な場所に住んでた人が山の方に当たったら「そんなところよう住まん」となる。私の父なんかそれでうちにしょっちゅう来てました。そうなると、地域の付き合いもなくていよいよおもしろくなくなる。ところが、「せっかくこんな何にもないところに来たんやから、畑でも作ってみよう。キューリ植えよう、花植えよう」と言う家族もあるわけです。そういうのってええなあって思いました。で、水をやったり、採れたものをみんなで一緒に食べる機会ができ、話もするようになる。そういう考え方をする人がひとりそこにいるかいないかで、全然変わってくるわけです。震災で駅がつぶれた、駅の位置が少し変わり、駅近くのパン屋だったのが「駅前」のパン屋になった話も実際ある。けど、震災でいいこともあったみたいな話はしてはいけない、みたいな風潮がありますよね。マスコミの方も「逆に大変な思いをしておられる方があるからそれはちょっと…」と、とりあげようとしない。でも、復興のなかでも、楽しい思いをしたこともあれば、かえってよくなったと前向きに捉えることもできるかと思うんですよ。そういうことをどんどん発信したらいいと思うんですけどね。

林　同感です。僕たちのやっている調査でも、8年目になると震災の「意味」について考え始めた人が目立ちました。結局、自分にとって地震とは何だったのか。もっと言えば、そこからプラスの要素を見い出そうとしている。ある意味、渦中から

●活気がもどってきた神戸元町商店街

ひとつ抜けたっていう人が増えたせいだと思うのですけどね。そのことを去年「約8割の人が震災前の状態に戻った」と発表したら、ある新聞は「まだ2割被災者だ」とコメントをつけたのです。まあ、それはどっちを見るかの問題ですけども、全体からみれば少しずつ抜け出して、自分たちが振り返りをして「こういうものだったなあ」と思おうと努力しているのも事実で、そういうものを認めてあげなかったら復興なんてできっこない。認めずにいつまでも被災者をやっていろというのもおかしな話です。

防災力を高めるために いま何が求められているか

桂　私の考える防災力のキーワードは、先ほども言ったように「長屋的な暮らし」で、それは防災にも防犯にも共通しているような気がします。私事ですが、13年前、連続殺人犯に強盗に入られたことがあります。後で聞くと、犯人は私が何時頃帰ってくるか近所に聞いて回っていたそうなんです。なら、近所付き合いがあればもう少し防げたんじゃないかと。逆に今回の震災では、向かいや隣の人が何十年という付き合いで、父親が「奥の部屋のこの辺で寝てる」っていうことまで知ってたからこそ、家がつぶれても助けてもらえたんです。若い頃うっとおしいと思っていたものが、命に関わるくらい大事なものやったんやということを私はこの震災で痛感しました。一軒一軒の家を作るより、街=コミュニティを作ることが大事とさえ思います。うちには今3歳の子供がいます。ここに父親が病院から帰ってきたら、私ひとりで子供と年寄りの面倒をみなあかんようになる。こういうケースはどんどん増えてきますから、昔の長屋的な「ちょっと出てくるから子供見といて」と言えるコミュニティがないと無理やと感じることがよくあります。と言いながら、私は今のところ1フロアに2戸しかないマンションの、向かいは空き家というところに住み、ちゃんとした近所づきあいもできてません。だから、行きつけの店を作るとか、近所に住んでる仲間とかと情報交換するようにしてます。

林　血縁でなくてもいいのですよね。いろんな「縁」を豊かにするっていうのが新しいやり方としてある。自分が選ぶようになってみればいろんな縁があるわけで、血縁もあれば、地縁、仕事の縁、趣味の縁というように多様化しています。ネットワークを豊かにする生き方は重要だと思いますね。次に起こる東海地震と東南海、南海地震では80兆円ぐらいの被害が出るとされています。当然、国内だけで補うのは無理ですから、海外で起債したり、海外の技術者に支援を求めるようなことが十分起こりうる。平常時の今、土木技術を必要とするアジアや太平洋の途上国に赴いて、技術者を指導して災害に強い国づくりをサポートし、いざというときに還って来るような仕掛けを先に作っておくということも考えられます。そういう意味では、桂さんが言われる「人とのつながり」っていうのはプロフェッショナルの世界にもあるし、グローバルな意味でのつながりでもある、世代間を超えてのつながりと言ってもいい。ご近所の長屋の暮らしも地球規模での長屋の暮らしも、構造的にはよく似ているように思います。そこが全体としてのいいキーワードになりますね。震災で大変な想いをしたわが国だからこそ、技術の面でもソフトの面でも世界に貢献できることがいっぱいあるし、その責務もあると僕は考えています。

阪神・淡路大震災というのは、関西が地震活動期に入ったことを教えてくれた最初の地震です。今後、21世紀の前半（具体的には2020年から2040年くらいの間）と22世紀前半の2度にわたって関西は大地震の活動期を迎え、大規模な面的破壊が起こると予想されます。そういう未来を含めて、防災力を高める社会基盤づくりに必要なことは何か。整備に携わる皆さんへの期待として、私は次のふたつをあげたいと思います。ひとつは被害を最小限にする工夫であり、もうひとつは被害が生じた後の復興です。前者として、既存の社会基盤の耐震性を高めたり、老朽化した社会基盤を再建しておくことがあげられます。後者については、22世紀に向けた日本のビジョンを持ち、2020～2040年の面的な破壊が起きた際に、新しい日本の国づくりに向けてスタートが切れるよう用意をしておいてほしいということ。さらに、当然出るであろう被害に対してできるだけ意味のある復興を実現するために協力してほしいということです。特に、公的な機関、あるいは税金だけで日本の国土ができるとは思いません。この国の100年、200年のビジョンをみんなで作り、実現に近づける――。例えば空港ひとつとっても、私たちの子孫がよく暮らし、より生き延び得る設備としてビジョンを収斂すれば、機能や規模はおのずと決まり、結果的に防災力を高めることになるのではないでしょうか。

※この対談は2005年8月1日に行われたものです。